

ハーン生誕150年記念企画 (2)

ハーンと熊本作品

西川 盛雄

西暦2000年の今年にはラフカディオ・ハーン（小泉八雲）生誕から150年目にあたります。熊本でも6月以降さまざまな催しが開かれます。熊大でも11月3日（金）から19日（日）まで五高資料館でハーン特別展が予定されており、3日には小泉家直系の小泉時さんが熊大に来られ、講演して下さる予定です。

ハーンは1850年（嘉永3年）6月27日、ギリシャのイオニア諸島のひとつ、サンタ・マウラ島（現・レフカダ島）に生まれ、1904年（明治37年）9月26日（月）東京で亡くなっています。短い54年の生涯でしたが残した仕事は膨大です。ハーンが1890年（明治23年）4月4日に来日し、一年の松江滞在の後、列車で1891年（明治24年）11月19日（木）午後5時36分に春日駅（現・熊本駅）に到着したとき駅頭に出迎えたのは嘉納治五郎校長でした。翌日には第五高等中学校に出かけ、校舎を一時間程見てまわっています。この時から1894年（明治27年）10月6日（金）に熊本を去り、神戸に行くまでの3年間弱、ハーンは確かに英語教師としてここ熊本にいたのです。

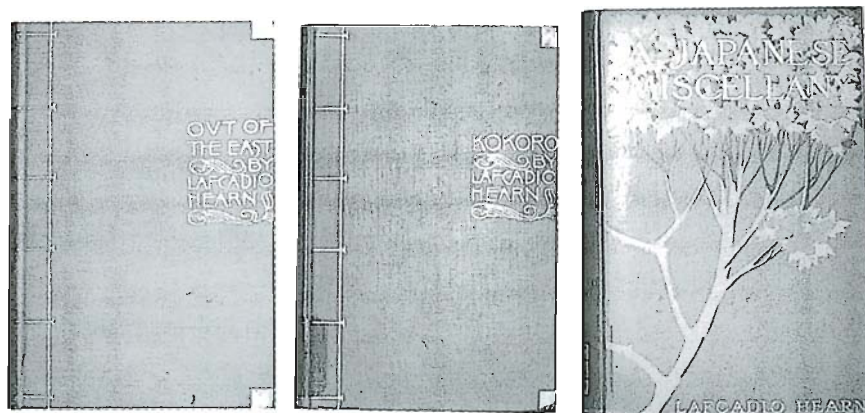
このハーンが熊本を舞台として書いた作品には案外身近なものがあります。構内にある赤レンガの五高関係の建物はもちろんのこと、作品『柔術』

の中には、今では無くなっていますが、「瑞邦館」という広い百畳敷きの部屋があり、ここには会津藩から来て、ハーンの尊敬を一身に得ていた漢文教師の秋月胤永先生の肖像画と白虎隊の図が掲げてあったといえます。この作品では、恐らくは嘉納治五郎から聞いたであろう日本の柔術が西洋武道といかに根本的に違うかが見事な比較文化的手法で描かれています。『九州の学生とともに』は五高生の書いた英作文の文章を中心にして、当時の学生の精神気質が作品として絶妙に描き出されています。

熊大裏の小峰墓地にはハーンゆかりの鼻の欠けた石の仏像があり、授業の合間にハーンがよく散策した所です。ここからの景色を作品『石仏』の中でハーンは「ひろびろとした万緑の肥後平野が一望のうちに眺められ」「阿蘇火山が永遠の噴煙を吐いている」（恒文社：平井呈一訳）と記しています。『願望成就』は松江の学校で教えたことのある小須賀浅吉が熊本の連隊に転属し、出征直前に暇乞いのためにハーン先生に会いに来、先生と死と靈魂の話しをし、やがて戦地に赴き、戦死する話しです。ここには日本と西欧の死生観の比較がテーマとして底流にあり、西行の和歌や西南戦争のときの熊本籠城の歌が出てきて奥行き深い



小品「石仏」に登場する通称鼻欠け地蔵



左：「柔術」「九州の学生とともに」等を収載したOut of the East (1895)
 中：「停車場で」を含む Kokoro (1896)
 右：「橋の上」を収載するJapanese Miscellany (1901)

作品となっています。この舞台はハーンの家ですが、鶴屋百貨店の裏にある小泉八雲旧居跡をぜひ訪ねられたらいかがでしょう。

実際にあった殺人事件の新聞記事を参考にしてハーンが再構成した作品『停車場で』の舞台は池田駅（現・上熊本駅）です。熊本で殺人を犯した凶悪犯が福岡で捕まり、警部によって熊本に護送されてきたとき、この犯人は自ら殺した警官の未亡人と子供を前にして罪の意識に駆られ、特にその子供に向かってはあられもなく詫びます。その碎かれた姿を見て護送してきた警部や見物人が涙を流す場面がクライマックスですが、この情景の中にある日本人の心情の機微をハーンは一瞬の絶妙なタッチで描写しています。名作『夏の日』はハーンが明治26年7月に長崎に旅をし、熊本に帰るときの物語です。三角港の宿屋「浦島屋」から宇土半島を人力車で旅する時に見た風景描写の美しさが印象的です。浦島屋で出会ったうつくしい女将の印象につなげてハーンはここで西洋人の目からみた「浦島太郎」の物語に再解釈を与えています。中に長浜（神社）でみた小さな泉の湧いている所を舞台にした「若返りの泉（清水）」の話や宇土の雨乞い太鼓の「ドーン、ドーン」という音が全体作品を引き締まったものになっています。

もう一つ、ハーンには熊本を舞台に明治10年に勃発した西南戦争を背景にしてできた佳品『橋の上』があります。恐らく長六橋での出来事と思われませんが、薩摩の兵士三人が町中から馬で駈けてくる官軍の兵士を雨中闘いにする壮絶な現場に遭遇し、命をからくも助けて貰った車屋平七が、二十三年後、この橋を人力車で通る時に、回想して客であるハーンにしみじみと当時のことを語って聞かせるという物語です。

他にもまだありますが、少しばかり熊本を舞台にしたハーン作品について触れてきました。いずれも印象深く作品としても優れたものです。日本文化の解釈者であり、英語による欧米への紹介者であったハーンの仕事が今日新しく、ますます見直されてきています。この文豪の生活と創作の舞台のひとつがここ熊本であったことを誇りをもって今一度思い起こしてみたいかがでしょうか。

（にしかわ もりお 教育学部教授）

*八雲文庫、ラフカディオ・ハーン・コレクションは、中央館の貴重書庫に別置しています。ご覧になりたい方は、カウンターにてご相談ください。